EntryNo. 17

当院における臨床検査技師の病棟業務に関する試み

病棟での採血管と細菌検査に使用する備品管理について

◎平田 哲也[1)]、松谷 真理子[1)]
重工記念長崎病院[1)]

【病院概要】

当院の診療科は内科、外科、眼科、皮膚科、泌尿器科、整形外科、婦人科、耳鼻咽喉科、心療内科、放射線科、歯科など 13 科で、病床数 184 床、一日平均外来患者数約 300 名、病棟は 4 区分となっている。

【検査部概要】

検査部人員は 9 名で、施設内検体件数は生化学検査が約 100 件/日であり、外来患者さんの採血業務を担当している。

【実践している取組み】

今回発表する病棟の採血管と細菌検査などに使用する備品の管理。また、腹水（胸水）濾過濃縮再静注法（CART）やラジオ波焼灼療法（RFA）の介助を、医師と看護部からの依頼を受け担当している。

【導入までの経緯】

病棟で使用する採血管管理を看護師が担当していたが欠品することや使用期限が過ぎている場合があり不充分な管理体制であった。

【実際の運用】

①机の引き出しに収納できるステンレス製の箱に 9 種類の採血管をセットし、1 ヶ月毎に交換するようにした。②細菌検査などに使用する備品も同時に管理することとした。

【実践後の課題あるいは他職種からの取組みへの評価】

看護部より、採血管取り違い採血や使用期限の過ぎたものでの採血が無くなり、感謝される評価を受けたが、その背景には病棟薬剤師配置による病棟看護師の薬剤関連業務の負担減を検査部門にも求めたい願いがあったのではないかと推測される。

【今後の展開について】

病棟業務と直接関係ないが、現在、聴力検査を人員の関係上看護部が担当しているのでその取り込みや尿素呼気試験説明と検査実施を技師が担当出来ないか検討している。また、検体採取研修会への参加は病院負担で行ったためインフルエンザ検体採取業務も次期冬季には検討している。

連絡先:095-828-4841

EntryNo. 48

検体採取における病棟への介入

◎坂口 麻亜子[1)]、高野 宏美[1)]、林 真美[1)]、伊藤 将大[1)]、丸田 秀夫[1)]
社会医療法人財団白十字会 佐世保中央病院[1)]

【はじめに】平成 27 年 4 月の法改正により、臨床検査技師の業務範囲に一部の検体採取が追加され、当院でも皮膚科領域の白癬菌検査や救急外来のインフルエンザ検査、手術予定患者の MRSA スクリーニング検査について取組みを始めた。今回、病棟へも介入している皮膚科領域の検体採取について開始までの取組みと現状及び今後の課題について報告する。

【開始までの取組みと現状】
法改正以前は皮膚疾患のある入院患者に対して主治医が直接皮膚科へ紹介をし、皮膚科医が必要に応じて検体採取を行なっていた。診察室へ来ることが困難な患者に対しては回診し、検体を採取していた。平成 27 年 4 月皮膚科医師へ臨床検査技師の検体採取の業務拡大について説明を行ない、理解を得たのち、トレーニングを開始した。7 月には医局会で運用の概要を説明し、8 月よりオーダーリングシステムでの依頼で臨床検査技師による検体採取を開始した。主治医は白癬菌疑いの患者に対し、顕微鏡検査のオーダーを入れ、私たち検査技師が検体採取を行ない、結果を主治医や病棟に報告するようになっている。8 月開始から 5 月末現在で 33 例実施しており、約 3 分の 1 が病棟からの依頼であった。

【今後の課題】
外来では主に足からの採取が多いが、病棟では陰部など服やおむつに隠れた部位が多いため、看護師の協力を必要とする場合が多い。また、これまで患者と接する機会の少なかった微生物担当技師が行っているため、患者や看護師とのコミュニケーションの取り方が課題であると考える。

【まとめ】
当院において現在検体採取での病棟への介入は皮膚科領域だけであるが、今後採血を含めた各検体採取やその他臨床検査技師が介入できる業務を増やし、病棟に臨床検査技師が配属されるような体制を構築していく必要があると考える。

連絡先）0956-33-7151

EntryNo. 67

聖隷横浜病院における臨床検査技師の病棟業務に関する試み①

検査部門管理者の対応と対象選定について

◎吉田 功[1)]
社会福祉法人 聖隷福祉事業団 聖隷横浜病院[1)]

【はじめに】
2015 年 7 月 日臨技より、臨床検査技師の病棟配置の検証依頼が当事業団臨床検査部門にあり受諾した。
9 月に聖隷横浜病院（300 床）、2016 年 1 月に聖隷浜松病院（744 床）で検証を実施し、2016 年 1 月「病棟業務推進講習会」、9 月「第 65 回日本医学検査学会」に於いて報告した。
当院では検証後、2016 年 3 月より週 1 日ではあるが、病棟に検査技師を配置した。
本支部学会では、聖隷横浜病院での検証報告を中心に、その後の配置についても報告する。

【検査部門管理者としての対応と課題】
検証にあたり検査部門管理者として、
①検査スタッフへの説明と同意
②病院への説明と承認
③看護部と病棟選定
④派遣技師の選定
⑤病棟で実施する検査関連業務項目作成
⑥病棟課長との業務選定
⑦アンケートの依頼　を対応した。
病棟選定では、検査技師の力が発揮できると思われた糖尿病(SMBG)、消化器(輸血)、循環器(心電図)の 3 病棟から、看護部から必要とされた循環器病棟を選定した。
派遣技師の選定は、
①メラビアンの法則
②コミュニケーション力
③判断力
④知識・技術
⑤前向きさ　を考え選定した。
派遣当初、スタッフが受けるストレスは大きく、毎日のコミュニケーションが重要であった。
今後の課題として、専門性を高めた認定技師も必要ではあるが、幅広い知識・技術を持ち、検査説明・相談ができるジェネラリストを育成していかなければならないと感じた。

【まとめ】
病棟業務推進施設情報連絡会のアンケート結果では、病棟に出向いて実施している業務はあるが、診療報酬に組み込まれていない中で病棟に検査技師を配置する人員の確保が問題となり、配置している施設は少ない。
当院でも検証することは認められたが、人員を増やして配置するに至っていない。しかし、「必要とされるところに」「できることから」「できる範囲で」取り組んでいくことで『臨床』検査技師の未来が開けると考え、週 1 日ではあるが、病棟に検査技師を配置した。
今後、病棟への検査技師の配置が多くの施設で取り組まれ、行政、関係医療団体にその必要性が認められることを切望する。

連絡先　045-715-3111

EntryNo. 68

聖隷横浜病院における臨床検査技師の病棟業務に関する試み②

実経験からわかる病棟検査技師の役割について

◎吉田 功[1)]、杉岡 結衣[1)]
社会福祉法人 聖隷福祉事業団 聖隷横浜病院[1)]

【病棟で実施した業務】
検査関連業務としては、
①採血、動脈血採取補助、培養検体採取補助
などの検体採取
②検体、輸血製剤の搬送
③患者への検査説明
④心電図測定
⑤医師・看護師への検査結果報告
⑥昼食前血糖測定
⑦患者搬送
⑧検査関連の物品管理
⑨検査結果のカルテ添付
などを行った。
検査関連外業務としては、
①病棟の電話対応
②ナースコール対応
③患者のトイレ介助
④患者家族や面会者の対応
⑤ベッドメイク
⑥患者のベッド移動
⑦配膳補助
などを行った。

【実地検証結果】
9日間の実地検証での1日あたりの平均時間は、
患者情報管理：63.9分
検体採取（採血含む）：57.9分
検査関連管理業務：49.2分
すべてを累積した時間は、311.9分であった。

【アンケート結果】
看護師からは、「看護師の検査業務の負担が軽減した」、「患者の直接ケアに従事する時間が増えた」との評価が得られた。
患者からは、「医療職種として放射線技師に次いで認知度が低い」、「検査に関する説明を望んでいる」ことが示された。

【派遣した検査技師の感想】
病棟看護師と実施する検査関連業務の抽出を行い、事前トレーニングを開始したが、病棟では検査室のように依頼された検査を待つという態度では、仕事がない状態であった。
医師、看護師、また看護助手や病棟クラークと積極的に関わりを持ち、自ら進んで仕事を探すことを意識して、病棟での業務に取り組んだ。まず、他職種とのコミュニケーションをいかに密に取っていくかが重要であった。
その上で、検査技師として採血技術、血液データの読み方・考え方、超音波検査など幅広く知識・技術を習得する必要がある。また、患者と深く関わっていく上で、ME 機器、薬剤や栄養指導など検査関連外の知識も必要であると感じた。
病棟検査技師に将来性を感じたが、病棟という新たな業務の場に進出するためには、検査業務だけを行うというのではなく、同じ病棟スタッフとしての意識を持ち、『患者さんのために』協働していかなければ、病棟検査技師としての未来は開かれないと感じた。

連絡先　045-715-3111

EntryNo. 124

当検査科の業務拡大と病棟業務取組みの現状

病棟業務確立を目指して

◎神谷 乗敏[1)]、仲松 勝彦[1)]、津波 克幸[1)]、島袋 泰彦[1)]、新里 直子[1)]、蔵下 恒[1)]、我如古 靖[1)]、斎藤 辰好[1)]
社会医療法人 かりゆし会 ハートライフ病院[1)]

【はじめに】

コンピューター技術の進歩に伴い紙カルテは電子カルテへと移行し、新たに診療補助業務として電子的カルテ入力業務（医師事務作業補助）にも保険が認められるようになった。

紙カルテ運用時、我々は依頼伝票に記載された患者情報のみで検査を行い、必要時にに病棟や外来のカルテを閲覧するのが通常であったが電子カルテ導入にバイタルサイン、画像データやその他多くの情報がリアルタイムに入手でき、検査結果の総合的な検討が可能になり生理検査所見や検体検査カルテ記入業務も可能な状況になった。今回、病棟検査業務推進協議会に参加し多くの検査室の状況を踏まえ、時間と情報を活用し臨床検査技師が関われる新規業務や病棟業務について検討した。

【病院概要】診療（300 床）33 診療科、平均在院日数 12,6 日、平均外来 476 名/日

1.医師臨床研修指定病院（基幹型）
2.地域医療支援病院
3.24 時間二次救急指定病院
4.DPC 対象病院
5ICU11 床、無菌治療センター 10 床
6 人間ドック 15000 名/年
7 クリニック糖尿病内科、小児科

【検査室概要】（職員数）.臨床検査技師人間ドック７、検査科検査技師 31　視能訓練士 1、助手３名（業務）生理機能検査、検体検査、病理細胞検査、ＭＲＩ検査、眼科検査、耳鼻科検査、院外クリニック業務、細胞調整室、幹細胞移植、骨髄移植業務（その他資格）細胞検査士 3、超音波検査士 5、緊急検査士 1、衛生管理者 3 名、【当直業務】月２回、８時 30 分～翌 9 時

緊急検査項目、交叉適合試験、脳 MRI 撮影心臓カテーテル検査、超音波検査

【機器】日本電子ＢM6050 分析機器 2 台、アークレイ Hba1Ç 測定装置 2 台、血糖測定装置 1 台浸透圧測定装置、ＵＢアナライザ-、シスメックス自動血球計算機 2 台、アーキテクト 2000i1000i 免疫測定機器、オートビュ―自動輸血検査機器、迅速病理標本作成機、アイソレータ等【現病棟業務】

1、細菌検査担当技師 ICT ラウンド
2、NST チームラウンド
3、SMBG の指導、POCT 指導管理
4、PSG 装着検及び検査
5、24 時間食道 PH 検査
6、採血管配達、特殊採血等の患者へ説明

【取り組んだ業務】

超音波検査全般、心電図検査、出血時間検査、SMBG 指導、採血容器説明、検査説明等

当院の全床個室の利点をいかすべく毎年度事業計画に病棟担当技師業務の確立を掲げ外来患者とは別々に検査を行う事を目標とし担当技師の育成を目指した。主業務が超音波検査となるため時間を要し、外来待ち時間改善のため取り掛かるが、外来優先となり確立できていない。

院内感染対策、看護助手業務の改善、入院患者の検査移動の軽減を目指し、患者サービス及び病棟業務支援と検査業務の拡大のため継続して取り組みたい。

連絡先　098-595-3255　内線（5169）